児童一人一人に社会性を育み，「よりよい集団」をつくる指導の在り方（第一年次）
－「認め合い」に焦点を当てた教育相談的な手法を生かして－

長期研究員　徳 永　一 夢

≪研究の要旨≫

本研究では，児童一人一人に社会性を育み，互いに関わり合い，認め合い，助け合い，高め合える「よりよい集団」をつくることを目指した。そのため，担任との連携を図りながら，確かな児童理解を基盤として，「認め合い」に焦点を当てた教育相談的な手法を生かした授業や日常指導を積み重ねた。実践を通して，児童の承認感が高まったことにより社会性が向上し，学級や学年集団の実態に応じた「よりよい集団」への変容が見られた。

Ⅰ　研究の趣旨

学校は，児童にとってのびのびと過ごせる楽しい場でなければならない。研究協力校は，児童数約800名の大規模校である。「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」（文部科学省，2015）によれば，大規模校の課題として「一人一人が活躍する場や機会が少なくなる」ことや「児童生徒間の人間関係が希薄化する」ことが挙げられている。研究協力校の全教職員を対象に行った調査においても，集団づくりにおける同様の課題が見られた。一人一人がよさを発揮でき，互いを尊重し合う集団をつくるためには，自他を理解し認め合うことが重要であると考えた。また，そのような集団をつくる中で，他者とよりよく関わることができる社会性を育み，児童一人一人の発達を支援していきたいと考えた。

そこで，本研究では，「認め合い」に焦点を当てて，自己理解や他者理解の促進，リレーション※1の深まりに効果が期待される教育相談的な手法を活用した実践を積み重ねていくことで，児童一人一人に社会性を育み，「よりよい集団」をつくることを目指した。

※1　ふれあいのある，本音の感情交流。

Ⅱ　研究の概要

1　研究仮説

学級活動及び日常指導において，「認め合い」に焦点を当てた教育相談的な手法を生かし，指導の充実を図れば，児童一人一人の社会性が育まれ，「よりよい集団」をつくることができるであろう。

【社会性とは】

他者と関わる上で必要となる，「共感性」「集団参加能力」「コミュニケーション能力」「アサーティブ」※2の四つの要素でとらえた。

※2　相手の立場を考えながら，自分を素直に表現する力。

【「よりよい集団」に見られる児童の姿】

○関わり合い	相手を選ばず，進んでコミュニケーションを図る。
○認め合い	自分自身や他者のよさを認め，互いを尊重し合う。
○助け合い	相手の思いを考え，互いのよさを生かして協力し合う。
○高め合い	互いのよさを高め合うとともに，社会や集団の問題に対し合意形成を図り，協働して問題の解決に取り組む。

※　四つの姿に段階はなく，複合的に見られることが理想的であると考える。

2　研究の内容と実際

(1) 研究の内容

研究協力校の第４学年全学級（４学級）を対象に，**図１**の研究構想に基づいて実践を行った。

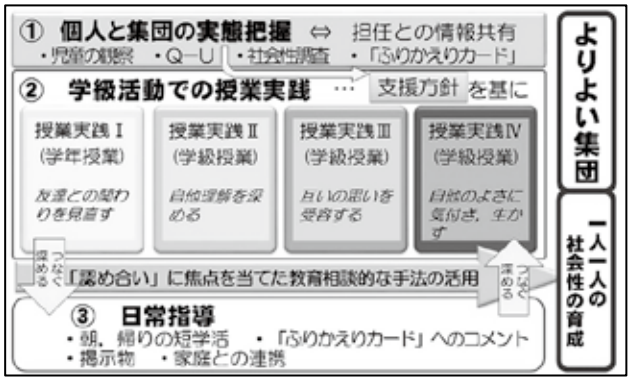


図１　研究構想

(2) 研究の実際

①　児童一人一人の社会性と集団の実態把握

児童の社会性について実態を把握するため，社会的スキルがどの程度身に付いているかを調査し，個人と集団への支援方針を明確にした上で実践ができるようにした。社会性と社会的スキルの関連を以下のようにとらえた。

社会性	社会的スキル
共感性	相手の気持ちを考えた働きかけ
集団参加能力	仲間の誘い方　仲間への入り方
コミュニケーション能力	あたたかい言葉かけ 状況に応じた質問のしかた 上手な聴き方
アサーティブ	優しい頼み方　相手に配慮した断り方

児童の実態を多角的・多面的にとらえるため，主に四つの方法で事前・事後調査を行い，得られた情報を担任と共有し，指導・援助の方向性の共通理解を図った。

○**児童の観察**；社会的スキルの観点で日常の様子を観察した。

○**Ｑ－Ｕ**；学級集団の状態をとらえるとともに，主に個人の承認感の変容について実態を把握した。

○**社会性調査**；社会的スキル８観点に，自己理解，他者理解の２観点を加えた 10 観点 20 項目について４件法で尋ねた。

○「ふりかえりカード」；授業での気付きを振り返らせることで，他者との関わりにおける意識の変容を把握した。

②　教育相談的な手法を生かした授業実践

事前調査の結果や各担任の意向を基に，学年・学級への「支援方針」を以下のように設定し実践を行った。

学年	相手の思いを理解し働きかけることができる集団に 向上をねらう社会的スキル …上手な聴き方　あたたかい言葉かけ
イ組	安心して生活できる集団に 向上をねらう社会的スキル …相手の気持ちを考えた働きかけ
ロ組	相手を思いやる集団に 向上をねらう社会的スキル …相手の気持ちを考えた働きかけ
ハ組	あたたかい雰囲気の集団に 向上をねらう社会的スキル …上手な聴き方　あたたかい言葉かけ
ニ組	互いの思いを受け入れる集団に 向上をねらう社会的スキル …相手に配慮した断り方

学級活動の時間において，構成的グループエンカウンター（以下，ＳＧＥ），プロジェクトアドベンチャー（以下，ＰＡ）などの教育相談的な手法を生かした授業実践を行った。児童が互いの存在や思いを「認め合い」ながら自己理解や他者理解を深めることをねらった。本稿では，授業実践Ⅰ（学年での授業）と授業実践Ⅳ（ハ組での授業）を基に，授業の実際について述べる。

授業実践Ⅰ　題材名「音楽祭をもり上げよう」 授業テーマ「友達との関わりを見直す」

【本時の概要】

学年として取り組む行事をきっかけとして，友達との関わりを見直させたいと考えた。ＳＧＥのエクササイズ「質問じゃんけん」「他己紹介」やＰＡのアクティビティ「アインシュタインの言葉」を通して，友達の新たな一面を知るための活動を行った。活動においては，学年において向上をねらう社会的スキルである「上手な聴き方」を意識させる指導を行った。

【児童の姿から】

Ａ児は，自分から友達と関わることが難しい児童だったが，他の学級の友達とも意欲的に関わり，相手の話を熱心に聴いたり，自分のことを伝えたりして活動を楽しんだ。シェアリングでは，活動を通して「友達が増えた」と，感じたことをうれしそうに発表する姿が見られた。

【「ふりかえりカード」から】

児童から「違う組の人と質問し合って相手を知り，友達になれた気がする」「もっと友達とふれあいたいと思った」などの感想が出された。互いを認め合い，安心して関わり合える場を設定したことにより，他者と関わる意欲の高まりや他者理解の深まりが見られた。

授業実践Ⅳ　題材名「学級のよさ（わたしのよさ）ってなんだろう」 授業テーマ「自他のよさに気付き，生かす」

【本時の概要】

一人一人のよさが集まって集団のよさとなっていることを意識させたいと考えた。ＳＧＥのエクササイズ「Ｘからの手紙」を通して，自分や友達のよさを見つめ直させ，互いのよさを素直に認め合わせる活動を行った。活動においては，ハ組において向上をねらう社会的スキルである，「あたたかい言葉かけ」の大切さに気付くことができるように振り返りを行った。

【児童の姿から】

導入段階では，多くの児童が「自分のよさなんて分からない」と話していた。しかし，活動を通して，友達から認められることを素直に喜び，自分のよさを見つめ直す児童の姿が見られた。Ｂ児は，事前指導で学んだリフレーミング※3の考え方を生かして友達の姿をとらえ直し，相手のよさを認める手紙を書くことができた。

※３　否定的に見られていることを別な角度から見直して，肯定的な意味合いに変える技法。

【「ふりかえりカード」から】

Ｂ児からの手紙をもらったＣ児の振り返りには，「うれしい言葉が書いてあって，自分のよさに気付けた」と書かれていた。また，Ｂ児の振り返りには，「自分や友達のいいところをもっと見つけて成長していきたい」と書かれていた。認め合う温かい関係を築いていくことで，互いに高め合うことができるという意識が芽生えていることがうかがえる。さらに，「友達をよく知ることで，クラスでも学年でも友達が増えていくのではないか」という振り返りも見られた。「よりよい集団」を自分たちで築いていこうとする意欲を高めることにもつながった。

③　児童の気付きをつなぎ，深める日常指導

ア　朝と帰りの時間の活用

朝と帰りの短学活の時間を活用し，授業と授業をつなぎ，自己や他者への気付きを深めることをねらった活動を行った。授業実践Ⅳの事前には，リフレーミングの考え方にふれさせ，授業において自分や友達のよさをより多面的に考えることができるようにした。また，事後には，授業実践Ⅳで作成した「学級のよさシート」を基に，学級のよさについて考えを深める活動を行った（**図２**）。授業での気付きを振り返り，友達の思いに共感させる場を日常的に設けたことは，友達への関わりをよりよくしようとする意欲を向上させる上で有効であった。

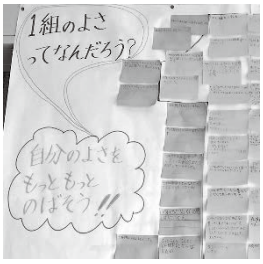


図２　学級のよさシート

イ　「ふりかえりカード」へのコメントの活用

教師が認めることは，児童一人一人の自信や自己有用感を高める上で重要であると考え，「ふりかえりカード」の記述に対して，児童の思いや気付きを意図的に認めるコメントを返した。児童の思いに対する受容や支持を意

識し，Ｉメッセージ※4を用いることを心がけた。担任からは，「うれしそうに読んでいる姿が見られた。よさを認められ共感してもらえることで自己肯定感も高められた」「実践意欲につながった」という意見が出された。

※4　主語を私（Ｉ）にして相手に伝えること。受け手に素直にメッセージを受け入れやすくすることが期待される。

ウ　掲示物の活用

「ふりかえりカード」の感想から，学級全体で意識させたいものを選んで教室内に掲示した（**図３**）。互いの感想を読み合い，思ったことを交流する児童の姿が見られた。担任からは，「学級で何か問題にぶつかったときに振り返って考えられ，折にふれて活用できる」という意見が出された。集団や個人の目標を，学級で共有しながら生活をさせる上で有効であったと考えられる。

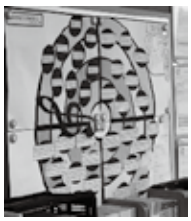
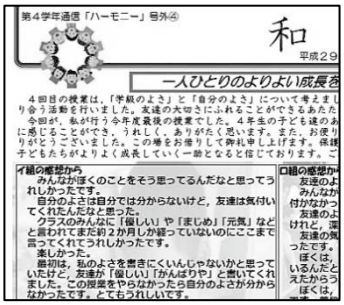


図３　掲示物

エ　家庭との連携

定期的に通信を発行し，授業の様子を発信した（**図４**）。自分の感想が掲載されることで，授業で学んだことがより意識付けられ，行動を見直すきっかけとなった。また，児童の保護者から連絡帳を通して以下のような感想が寄せられた。


第4学年通信「ハーモニー」号外④

和

平成29

一人ひとりのよりよい成長を

４回目の授業は，「学級のよさ」と「自分のよさ」について考えました。今回が，私が行う今年度最後の授業でした。４年生の子どもたちのお

に感じることができ，うれしく，ありがたく思います。また，お使り

りがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。保護

子どもたちがよりよく成長していく一助となると信じております。ご

イ組の感想から

みんながぼくのことをそう思ってるんだなと思ってう

れしかったです。

自分のよさは自分では分からないけど，友達は気付い

てくれたんだなと思った。

クラスのみんなに「優しい」や「まじめ」「元気」など

と言われてまだ約２か月しか経っていないのにここまで

言ってくれてうれしかったです。

楽しかった。

最初は，私のよさを書きにくいんじゃないかと思って

いたけど，友達が「優しい」「がんばりや」と言いてくれ

ました。この授業をやらなかったら自分のよさが分から

なかったです。とてもうれしいです。

ロ組の感想か

友達のよ

みんなが

付かなかっ

友達のよ

けれど，深

友達の気

ったです。

ぼくは，

いるんだと

えたからう

ぼくは，

図４　発行した通信の一例

> まず，否定しないで受け入れてあげるという所になるほどなと感心しました。親の私自身も，子どもの気持ちをきちんと受け入れようといつもしているだろうかと考えさせられました。

家庭生活において，保護者からの児童を認める声かけは，あらゆる場面で社会性を育成していく上で重要な役割を果たすと考えられる。

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果

(1) 事前（６月）・事後（10 月）調査の比較から

４件法による六つの設問で構成され，友達からの承認感の程度を表す「承認得点（Ｑ－Ｕ）」は，４学級中３学級で向上が見られた（**図５**）。また，「友達が何かうまくできたとき相手をほめている（社会性調査）」の設問において，全学級で 0.11～0.20 ポイントの向上が見られた。これは，実践全体を通して「認め合い」を促してきたことで，児童の承認感が高まったためと推察される。

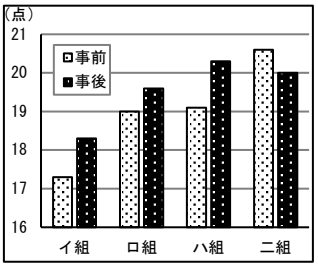


図５　承認得点平均値比較（24 点満点）

社会性調査の結果，全ての社会性の要素において得点が向上した（**図６**）。特に，学年の支援方針として取り組んだ「あたたかい言葉かけ」の社会的スキルについての設問では，全学級で数値の向上が見られた。また，「承認得点」の増減と社会性調査合計点の増減について関連を分析した結果，「承認得点が増加した」児童は有意に「社会性も向上した」といえる。「認め合い」を意識して集団づくりをすることが，児童の社会性を高めていく上でも有効であると考えられる。

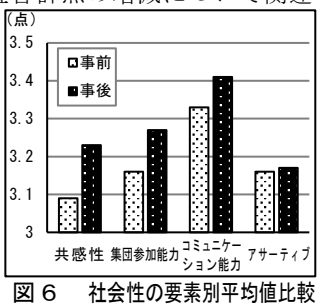


図６　社会性の要素別平均値比較

学級でのいごこちのよさを表す「学級満足度尺度（Ｑ－Ｕ）」において，**図７**のような結果となった。

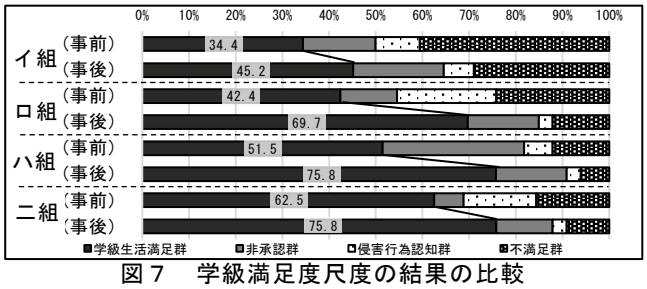


図７　学級満足度尺度の結果の比較

全ての学級で「学級生活満足群」の割合が増加している。学級の実態に応じて支援方針を設定し，「よりよい集団」を目指して実践をしてきたことで集団のリレーションが深まり，児童の所属感を高めながら「関わり合う」「認め合う」姿へと変容してきたと考えられる。また，実践後の担任との情報交換で，「問題が起きたとき，相手の言い分を聴きながら解決しようとする姿が見られるようになった」「共通の目標に向かって励まし合い，一緒に成功させようというまとまりが見られた」という意見が出された。児童の「助け合う」「高め合う」姿への変容を，担任が実感していることがうかがえる。

(2) 各学級担任との情報交換から

個々の児童や学級・学年の実態と支援方針について共通理解を図るため，担任との情報交換の機会を定期的に設けた。学年団としてのより確かな児童理解が，実態に応じて児童一人一人を支援していくことや「よりよい集団」づくりにつながったと推察される。

２　今後の課題

社会性調査の結果を分析すると，他者との協働に関連する課題が明らかとなった。今後は，協働性の視点から「よりよい集団」における児童の姿を明らかにし，より効果的な指導の在り方を探っていきたい。また，スキル面と情動面の両面に働きかけていくことで，児童一人一人に資質・能力としての社会性を育んでいきたい。